ホームページの開設

早いもので、退職してからの年金生活も 2018 年を迎えると、18 年目が過ぎようとしています。

昭和 38 年から平成 13 年 3 月まで、最後は旭川市の東方に位置する愛宕中学校に教頭として五年間勤務し、教職生活を終わりました。２２歳で北海道学芸大学 旭川分校（現北海道教育大学旭川校）を卒業して３８年間の教職生活でした。

これまでを辿って年月を振り返ってみると、様々なことが想起されます。中でも、国語教師としての私が自分の教育活動の中に位置付けた「文章作り」は、教科は勿論のこと様々な形で実践されました。それは、「学級通信」であり、「学年通信」であり、「国語通信」であり、そして、教頭になってから取り組んだ江丹別での学校通信「かがやき」、愛宕での「愛宕日報」の発行でした。また、それらの発行の手段もガリ版、ファックス、タイプ、そしてワープロ、パソコンへと時代の流れとともに変遷を遂げました。

教職についた当初から、自分の教師としての思いや指導観、保護者への連絡事項等を中心に編集してきた各種の紙面は、自分の教師としての成長の証しとして、更には心的な財産として大切にしてきました。そして、世紀が 20 世紀から 21 世紀に変わった 2001 年 3 月に、３８年余の教職人生を終わるに当たり、自分の生き様にけじめをつける「節目」として、ホームページ開設をしよ

う・・・との決意をしました。当初、冊子としての「まとめ」をすることも考えました。しかし、５３歳にして赴任した江丹別中学校で、先輩「佐藤　博先生」からパソコンの手ほどきを受け、それが自分の仕事の多くの部分を処理する機器となりました。文字通り「文明の機器」として、公私にわたる大いなる恩恵を与えられたのです。そんなわけで、パソコンを通して自分の思いを表現するのが、自分にとっては最も自然な表現方法である・・・、と考えるようになったのです。そして、一大決心のもとに 2001 年(平成１３年)１月１６日、ホームページの開設に踏み切ったのでした。

なぜ「牛歩の如く」なのか

　彫刻家としても有名であった詩人の高村光太郎に「道程」という詩集がありますが、その中の一編に「牛」という実に長い詩があります。私は、昭和 38 年に風連町立風連中学校(現在は名寄市立)に新卒の教師として赴任しましたが、この詩から発想した「牛歩の如く」という言葉を、自分

が歩むべき教師としての姿勢、教育の本質と考えて、毎年、学級目標として教室正面に掲げてきました。　**牛はのろのろと歩く　牛は野でも山でも道でも川でも　自分の行きたいところへは　まっすぐに行く　牛はただでは飛ばない　ただでは躍らない　がちりがちりと　牛は砂を掘り土を掘り石をはねとばし　やっぱり牛はのろのろと歩く　牛は急ぐことをしない　牛**

は 力いっぱい地面を頼って行く　自分を載せている自然の力を信じきって行く　ひと足ひと足牛は自分の力を味わって行く　ふみ出す足は必然だ　うわの空のことではない　是が非でも出さないではたまらない足を出す牛だ　出したが最後　牛は後へはかえらない　そして　やっぱり牛はのろのろと歩く　牛はがむしゃらではない　けれどかなりがむしゃらだ　邪魔なものは二本の角でひっかける　牛は非道をしない　（中 略）　利口でやさしい眼と　なつこい舌と　厳粛な二本の角と　愛情に満ちたなき声と　すばらしい筋肉と　正直な涎を持った大きな牛　牛はのろのろと歩く　牛は大地をふみしめて歩く　牛は平凡な大地を歩く　　光太郎は、「牛は平凡な大地を歩く」と表現していますが、「平凡に歩く」ということは、ただ「無気力に生きる」ということではありません。大きくて、ゆったりとした体を持ちながらも、自分の意思を持ち、その時々に喜怒哀楽の感情を素直に表現しながら生きることの大切さを、強調しているのだと思います。この詩は、平凡に生きることの大切さと同時に、それが我々にとって「どんなに非凡なものか」を暗示しているのです。

　新しい世紀、二十一世紀を迎えて 18 年を経過した現在、我々の周りは物質的にも精神的にも複雑多岐で、それに適応していくのは容易なことではありません。そんな中で、ともすれば簡単に他人を裏切ったり傷付けたり、即効的なものを努力もせずに手に入れようとする人間が何と多いことでしょうか。こんな世の中だからこそ、人間の着実な歩みの大切さ、非道を憎む心が必要なのだ、と強く思うのです。

こんなページ作りを

　先にも述べましたが、私が直接的な生徒との接触から離れ、教頭になってからの紙面づくりは、

2001 年 3 月まで勤務していた愛宕中学校教職員間で毎日の日程等を把握・理解するための資料「愛宕日報」として継続されていました。そして、それには同僚教職員や生徒たちの日々の生活や活動を含め、デジタルカメラで撮影した画像を添付するなどして紙面内容がより具体的に視覚で確認できるようにしました。また日常的な世情や身近なところで起こった出来事に対する想いを、「天声人語」や「卓上四季」の向こうを張って、「牛歩の如く」というコラムを通して感じたままに掲載をしてきました。　パソコンに手を染めるようになってから、発行部数なども多くなってきていましたが、日報のコラムに取り組むことになってからは毎日ということもあり、それなりに意識的に取り組まなければ…と、考えてきました。それは、1999 年度の発行から強くなりました。　何も分からない状態でマニュアル本を片手にＨＰ作りを始めてから、18 年余が経過しました。ともかく、教職生活晩年を中心とした「自分史」をホームページという場を借りて見直すことに力点がありましたので、それこそ「牛歩の如く」取り組もうと考えて現在に至っています。これまで親

しくご指導いただいた先生たちや、中学生時代の一時期「牛歩の如く」という言葉で学級や教科で結ばれた「教え子」の目に少しでも多く触れるだけで満足しています。そのことを通して、これまでの私の歩みが再確認され、残り少なくなった人生を前向きに取り組むことができるようになれば・・・、と益々強く感じ、願うようになっている近年なのです。